農業をまちのものへ
野菜の移動から仲町台を再構築する

八木橋京

1.Background
農業の物質性を失わせる宅地開発

農地の大規模な開発と郊外住宅地の拡大は、それまでの農と町の暮らしを大きく変化させ、お互いが隣接していながらも別世界のように農地と町の生活が展開していく。広大な生産地がすぐそばにあることに対して、無関心に感じられるような町や空間の作られ方をされていることに違和感を感じる。そういった場所に対し、農地と住宅地が隣接しているという場所の良さを享受できるような空間と両者の関係を再構築し、開発によって刷新された生活とそれまでの地域の生活が共存し、地域性に根差した新たな街のあり方について考察する。

2.Site
神奈川県横浜市都筑区仲町台

敷地は神奈川県横浜市都筑区の農業専用地区である。都筑区一帯は歳勝土遺跡が見つかることからもわかるように、昔から人々が住み着き、農村集落を形成し栄えていた。横浜市の六大事業である港北ニュータウン計画により、それまでの農耕地は区外縁部の数箇所にまとめられ、それ以外の場所は住宅地開発が進められ現在のようになっている。莫大な農耕地を失うことにはなったが、乱開発を防ぐため横浜市の「農業専用地区」に指定され、これ以上の農地の減少は抑制され、現在では横浜有数の生産量を誇っている。

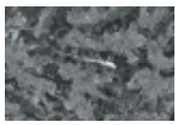
横浜という大消費地が近いため鮮度が重視されるホウレンソウや小松菜などの葉物の生産が多く、他にも都市のニーズに応えるためにビニールハウスを利用した促成栽培や抑制栽培も広く行われている。

しかしながら、住人はスーパーに野菜を買いに行き、大型商業施設で休日を過ごす。この広大な農業地域に関わりを持てるような空間がこの街には欠如しているように感じる。都市に住んでいてはできないような、都筑区ならではの農業、野菜、人との関わりやその生活のあり方を建築空間によって提示できるのではないか。

3.Research
港北ニュータウン計画

昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長によって、日本各地で無秩序な乱開発が行われていた。そこで横浜市は都筑区の豊かな自然環境を守るためにニュータウン計画を発案し、乱開発を未然に防ぐために計画的に人口を誘導することにした。

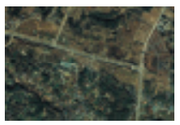
農地を保全するために「農業専用地区」に設定したが、ニュータウン中心部からはほとんどの農地が追いやられて、区外縁部に農地が集合している。また、計画としては歩行空間の充実を図り、街路樹が植えられた緑道や遊歩道がこの町の特徴である。



1961-

1974-

1979-



1984-

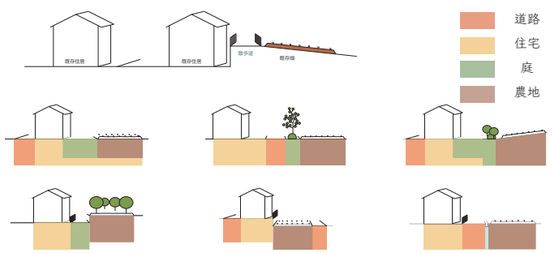
1988-

現在

3.Research
住宅と農地の境界

現地リサーチより住宅地と農地の境界は下記の七種類に分類できることがわかった。畑と住宅地の間をつなぐ動線が存在しないことや、段差・植栽・柵・塀など様々な要素によって分断されており、ニュータウン形成以降の移住者が既存農家と関わったり、農地に足を踏み込んだりするような機会があまりにも少ないように伺える。

これらの空間を境に、農地と住宅地の二つの世界が干渉しあうことなく生活を展開しているように感じる。



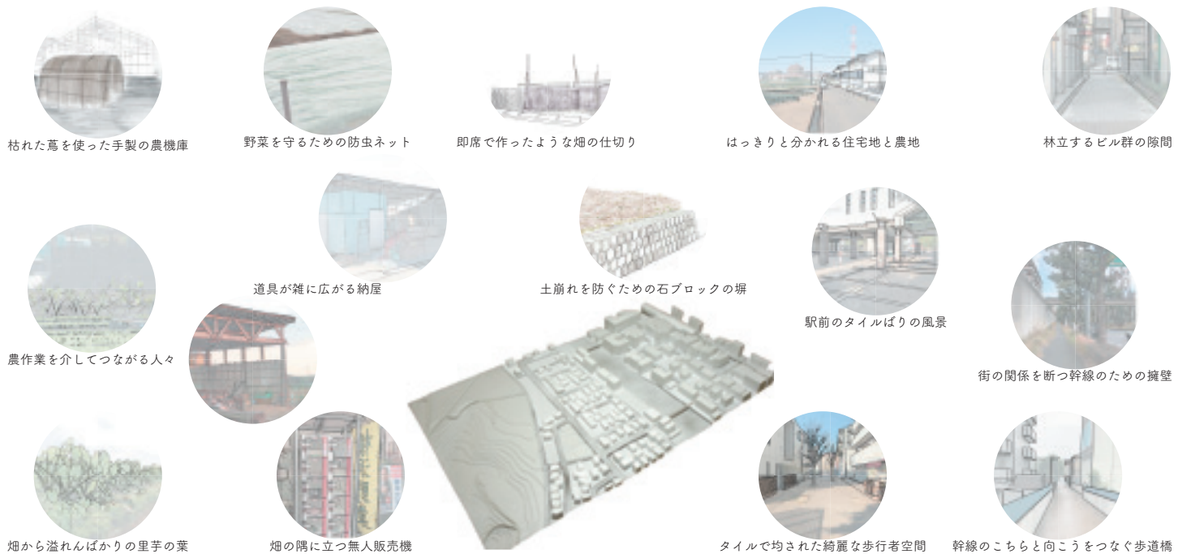
3.Research
現在の農家の暮らし

港北ニュータウン計画の影響を受け、農地と住宅との間が広がってしまったため、畑には車で通うような暮らしをしていることが現地の様子からもわかる。

昔は自宅と農耕地が近くにあることで、切っても切れないような農地のある暮らしを行っていただろうが、住人はもちろん農家ですら農地を身近に感じられる暮らしが形成されていない。

3.Research
仲町台を構成する物質

農地と住宅地が広がる仲町台において、この街を構成する物質を調査した。
この街の分断された農地と住宅地それぞれての生活の原因として、それぞれを構成する物質が異なることも挙げられるのではないかと考えた。ニュータウンのきれいに均された街並みと、農地の雑多な風景が、意図されずとも対比的に展開していることでお互いに干渉し辛くなっている様な印象を受けた。



4.Concept

農業と郊外住宅地が織りなす新たな生活風景

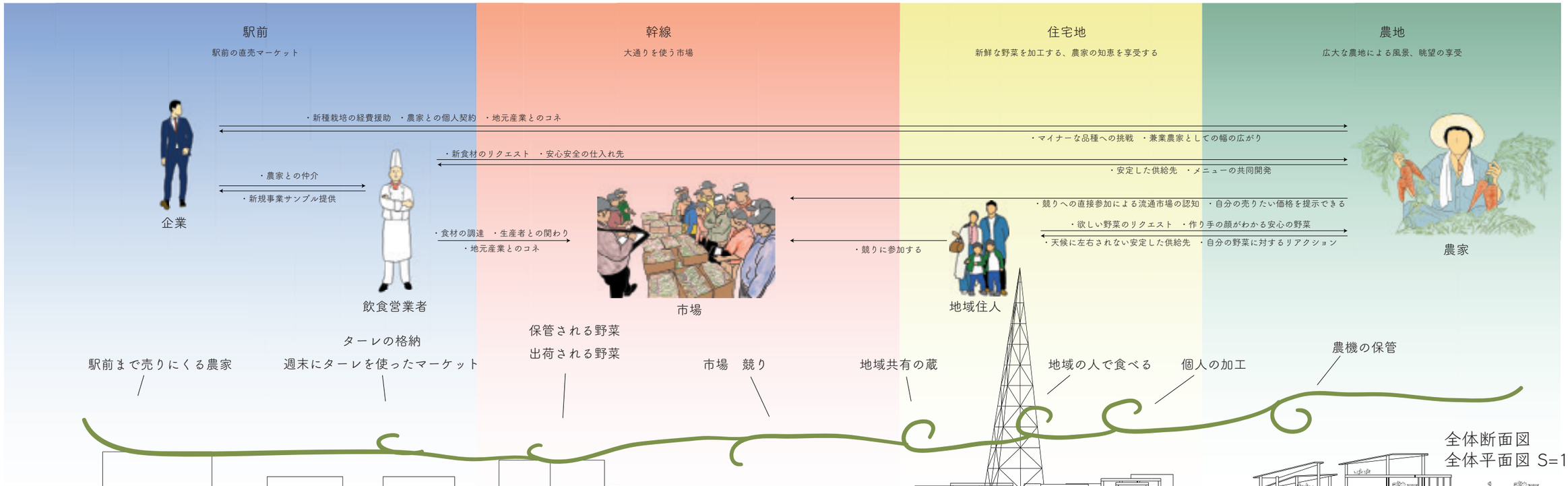
既に述べたように都筑の町では一般住人と農業が関わりを持てるような空間や、農地を背負う町で暮らすことの実感が欠如している。この状況に対して、農業と郊外の関係性が絡み合うようなまちのあり方を考えられないだろうか。それぞれの世帯が農地を持つこともなくなり、古くから農耕地として栄えた都筑の暮らし方を現代に おいて適用することは難しいだろう。しかしながら、地産地消における住人と農家の直接的な野菜のやり取りを町の中に顕在化させることで、農と郊外生活の断絶した二つの世界をつなぎ、新たな「農業まち」としての生活風景を提案する。

4.Concept

農家と住人の直接的なやりとりの場

現代の流通システムによって、生産された野菜が都市にほとんど出荷されていくため、まちには都筑区の膨大な農産物を許容できる場所が欠如している。 生産された野菜が農家によって直接届けられ、売られ、まちの人が買いに来れる様な直接的なやり取りの場所を提案する。

そういった場所がまちの中に表れることで、地域の住人やまちの企業、飲食営業者が農家と直接関わり合いお互いの関係性を発展させていくきっかけとなる。またそれが浸透したまちでの暮らしは、これまでの郊外生活とは全く異なる、農業とともにある新たな暮らしになる。

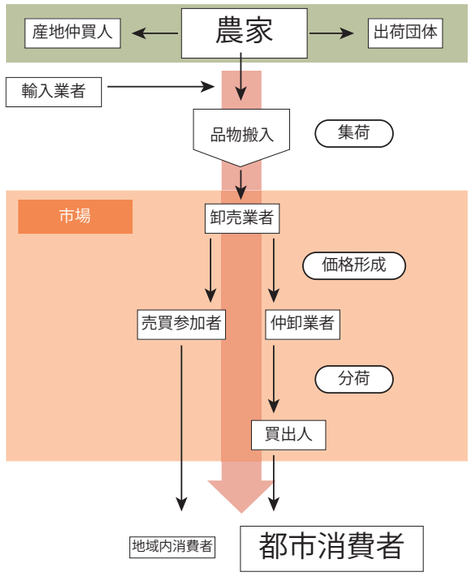


全体断面図
全体平面図 S=1:1000

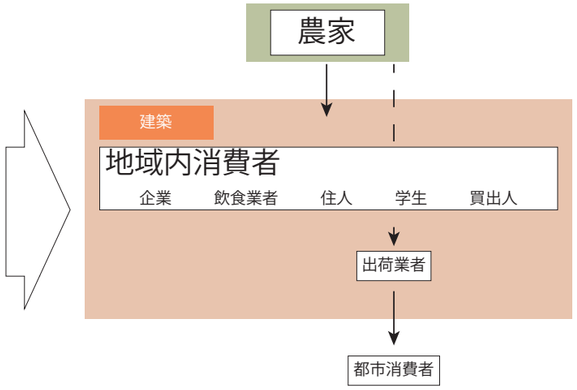
4.Concept

現代の流通システムからの脱却

都筑区で生産された農作物は、農協などの出荷団体に集められ、青果市場にて競りに落とされた後に一部が駅前のスーパーなどに届けられる。いずれの流通施設も住宅地からは畑向こうに設けられており、地元で生産された膨大な量の野菜が目に触れることはほとんどない上に、住人の手にわたるまでの仲介が多く、まちと農業の距離感が遠く感じる。また、さまざまな工程の中で洗浄され、パッケージされて売り場に出る野菜は、まるで工業製品のようにも感じられ、昔は当たり前の価値観であった大地との繋がりというものを感じられない。その関係性から、農家と地域の住人が直接触れ合えるような地産地消によって変化する農業と郊外住宅地の暮らしについて考える。



近郊農業として東京や横浜に出荷するための野菜が多く生産されており、
人々の手に渡るまでに多くの工程を経る必要がある。
そのため、外部からこの街を訪れた人はもちろんのこと、
地域の人々もまちの産業としての農業を認知する機会が少ない。

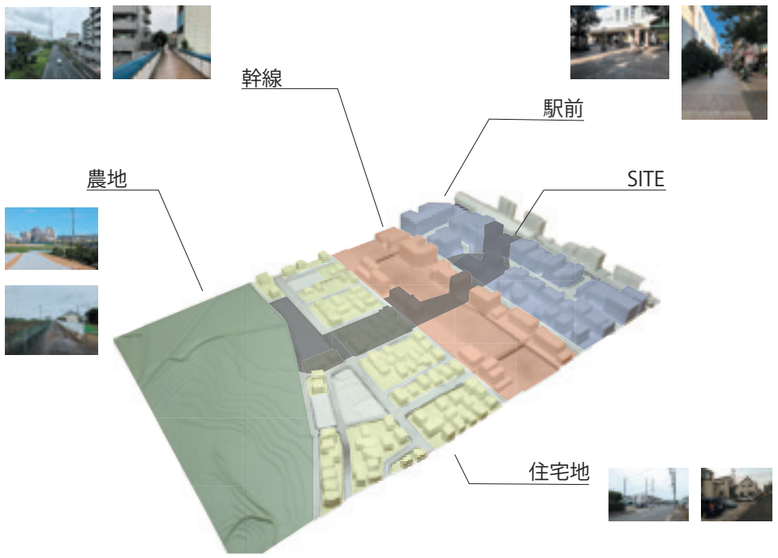


生産された野菜が都市に出荷されるまえに住人の手に渡るような、
地産地消の流通システムを挿入する。
住人と農業との距離感が近くなることで、
今までは業者だけが行っていた競りなどの市場での行為も街に開かれ、
他の街にはない農業とまちの織りなす生活が生まれる。

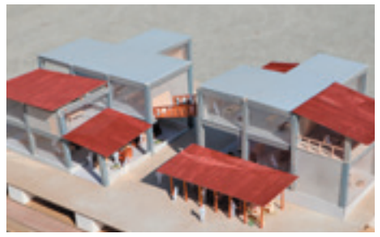
5.Masterplan

まちのレイヤーを横断する

まちのレイヤーを横断、畑へと建築が連なるように配置し、農とまちを繋ぐ軸としての役割を担う。
幹線によって駅前と戸建て住宅地、畑が大きく分断されたまちであるが、建築がそれらの分断を乗り越えて連なることで農地側に住む人はもちろん、仕事や学校に通うような、まちにゆかりのない人達までも仲町台の農業を認識しそのやりとりに参加できるような空間を提案する。



コンクリートブロックに木造の柱梁を通してトタン屋根をかける。それだけの操作だが農地に無数に点在している納屋のもつ力強さ、雰囲気、物質性に魅力を感じた。農地や住宅地であることに関係なく、建築が持つその構造、物質性をを持ち込むことで、農と郊外の暮らしを作る空間を提案する。

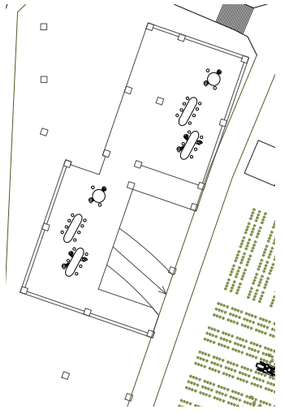


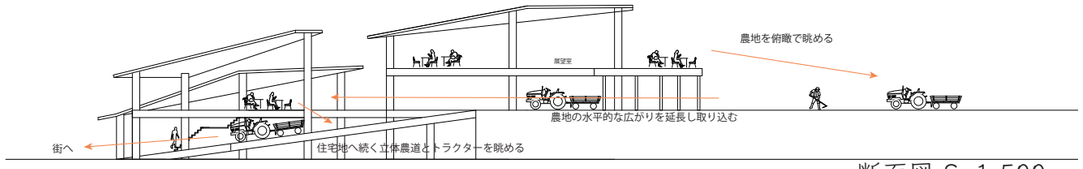
農の物質性を継承しながら建築を形作る

6.Site1　農地

広大な農地風景を享受する

都筑区最大の魅力である広大な農地風景を全ての人が享受できる空間が必要である。
農地を俯瞰で眺める経験と、農地が連続して建築内に続いてくるような経験、その両方を獲得できる建築を作る。
また、農地ー住宅地間の 4m の段差を立体農道として建築の中を通らせることで、街との接続面としての役割も担う。



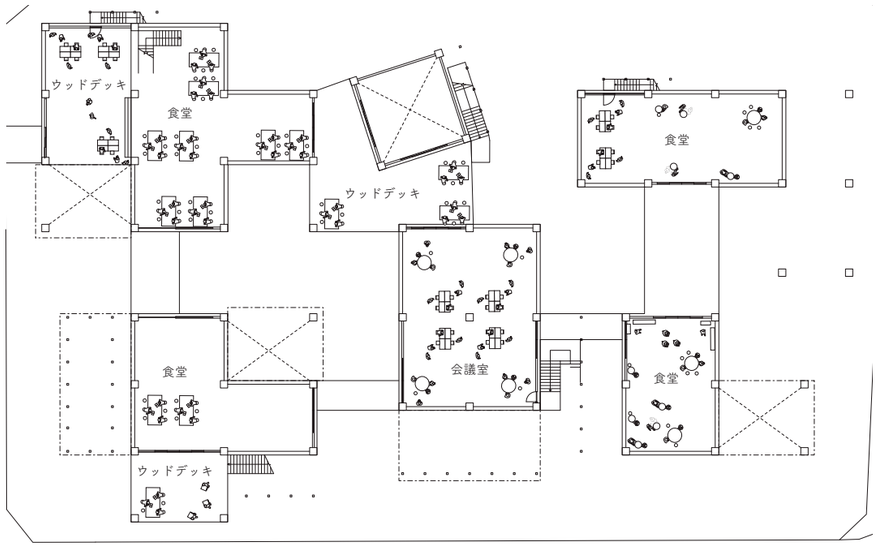


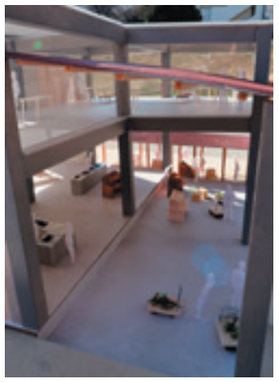
断面図 S=1:500

6.Site2　住宅地

野菜の集まるところに人が集まる

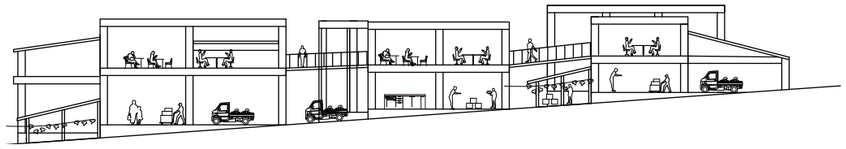
土間や張り出した庇の下で野菜のやりとりが行われる。街区一体がまちの加工場となり周辺住人はもちろんのこと農家や学生たちが街に溢れる都筑の野菜を漬物や干物に加工しにやってくる。
このまちでは野菜の集まるところに人が集まり、野菜の調理や加工を通してコミュニケーションを取ることで、農地と郊外の融合したまちの生活風景を作る。





吹き抜けを介して下階のやり取りを認識する

トラックを加工場に直接乗り入れる



2F 平面図
断面図 S=1:500

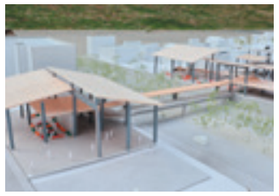
6.Site3　大通り

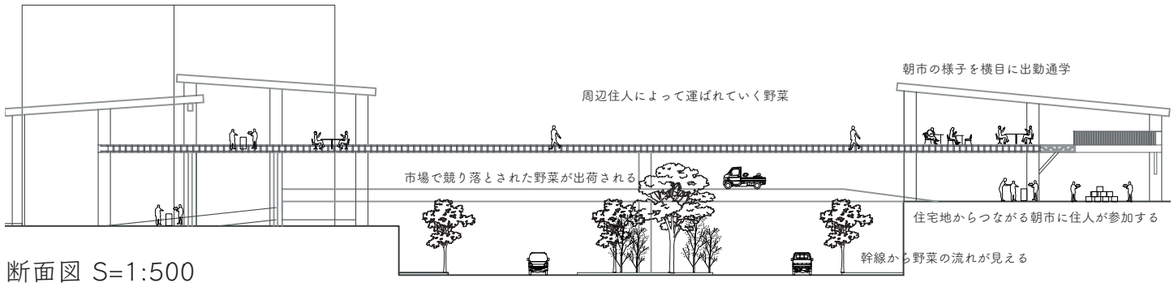
地産地消の下支えとしての市場

地産地消はいいことばかりではなく、一人一人の負担が増えるために街全体が疲弊していく懸念もある。地産地消によってまちの生活風景を変えていくためにも、それを支えるものが必要である。
街を流れる野菜に加えて都市への出荷や搬入の機能を持つ市場を提案する。
今までは専門の業者の間で行われていた競り等の市場での行為が街に開かれていくことで、農家と直接やりとりができる市場での購買活動がふえたり、朝市を横目に見ながら通勤通学する生活風景が現れるなど、街の中に市場があることがニュータウンの住人と農業を接続する様な役割を担う。

住宅地ー駅の動線を市場内に大通りを跨ぐ様に設けることで、地域に開かれた場所となる

競りが行われている様子が感じられる



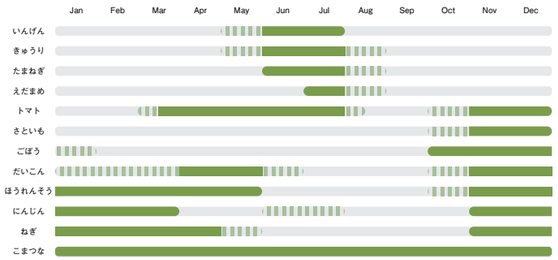


断面図 S=1:500

7.Vision

農業という時間軸の挿入

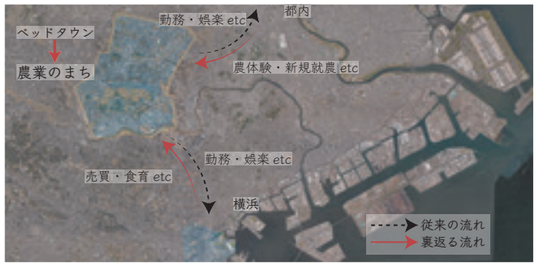
このまちで行われている農業は１ヶ月単位で通年で作られる作物や、季節によって変わる作物など、都市の中へ働きに出てベッドタウンとしてこの街を利用するような、現代の忙しない暮らしとは違う、大きく、ゆっくりとした時間のスケールを感じさせる。それが農家だけのものではなく、建築によってまちの中にまで流れ込んでくることで、都市で暮らす人たちが農業の持つ時間スケールを感じ、新たなまちでの暮らし方というものが生まれてくるような、この場所でしかできないような暮らしの風景、豊かさが生まれる。

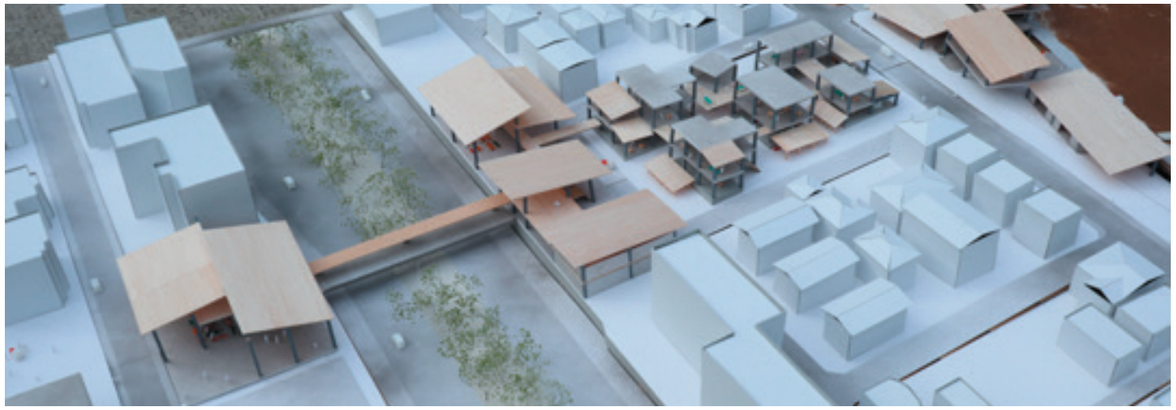


7.Vision

ニュータウンを裏返す

横浜の六大事業として生まれたこの町は、横浜や東京に対してベッドタウン的な役割を持っている。ここでの暮らしの向きはまちの外へ向かっており、街としての求心性を持たない。地産地消にあたり、まちの住人や外部の人までもが農業との関わりを持つために仲町台を訪れるようになる。都市へ出ていく以上にこの仲町台という郊外での農との関わりが人と人をつなげていくような、求心力を持つ場所になっていく。





卒制を振り返って

建築の形や空間まで提案を持っていけなかったことは大きな反省として残るが、
卒業設計を通して「農と建築」というテーマに出会えたことがとてもよかった。
昇華しきれなかったさまざまなことにこれからも挑戦していきたい。

本当に多くの人に助けられ、そのおかげでこの 4年間を過ごすことができました。
みんなの建築への熱意をひしひしと感じられる場所で
建築を学べたことにとても感謝しています。

Special Thanks

石井さん：忙しい中でも手伝ってくれてありがとう。いつでも手伝います！

こうへいくん・矢崎くん：

本当にたくさん手伝ってくれて、二人がいなかったらまじで卒業できませんでした。平和に終われなかったけど、前日の徹夜は大学生活の大きな思い出になりました笑
呼んでくれればいつでも手伝うので！飲みも行こう！

前田くん：救世主でした。本当にありがとう！

竹内くん：

1年生の手伝いの子も呼んでくれて、手伝いもたくさん来てくれてありがとう！竹内くんの人望万歳！

高井さん・高山さん・羽田さん：

わからないことだらけだったと思うけど、それでも手伝ってくれてありがとう！細かい作業本当に助かりました！ BTS練習しときます。

渡辺さん：

一年の頃から本当にお世話になりました。最後までありがとうございました。

匠：非常に刺々しかったけど、非常に頼りになりました。ありがとう。

虎太郎：最強の技術力の提供をありがとう。1年の頃から 4年間ありがとう。

輝一：夏前からずっとありがとうございました。

ちいさん：ちいさんが建築やっててよかったです。ありがとう。

さやかちゃん：たくさんの添景ありがとう。来年手伝います！

Comments from Classmates

モンスターの匂いをかぐと八木橋思い出します。

阿部ほなみ

京くんは万平の時からずっと食と建築ってことを考えてて、卒制では食事だけじゃなくて生産も考えるってことで農業に目をつけたこととか、農業と都市が隔絶されたような今の都市のあり方じゃなくて新たな関係を考えたいっていうのはとても共感します。街のレイヤーを横断して駅前と住宅地、農地を繋ぐ建築を作るって言うのは面白そうで、家に帰る時に競りとかが行われてるところが見れたら楽しそうだなと思いました。
建築としては幹線道路と建築が交差してると思うんだけど、幹線道路から建築への動線がない気がするので、そこの動線を考えることで幹線道路も含めて交わっていったら、搬入の動線とかそこを歩いてる人が引き込まれてくるとか、色々のアクティビティがもっと交わって面白くなりそうだなと思いました！おもちフレンド万歳！

東野有希

農地と郊外住宅地の境界部に設計するという着眼点が良くて、なんとなく何か新しいことができそうだと予感させた１年間…という印象。農を使ってどう具体的に楽しい生活ができるかという点でずっと悩んでいたのは知っていたし、それを追求された節があったので、何かしら提案できればとも思いつつ、難しかったのだろうと…。改めて提案の内容を見ると、多種多様なリサーチがされていて、真面目な部分が反映されていると感じつつ、純粋な京の気持ち的にこういうのが面白い、楽しそうといったリサーチなのか、イメージなのか、なんでも良いけど、そうしたものがどこかにあると、魅力的な設計になるのかと思った。いろいろ書いたけど、壊滅的に追い込まれていたにもかかわらず、リサーチ、提案、設計全てバランスよく仕上がっていて、京らしい集大成になったのではないかと思う。

馬場一輝

八木橋の卒制も終わったのかと、卒本を読んで感慨深い。農業は、人の生活の最重要の職業でありつつも、近代化によって一番遠い存在になってしまった。それを、近づけようという難題に取り組んだことをまず評価したい。その上で、とても気になった言葉が、農業の「雑多さ」である。農業を近づけようとしている設計者が使う言葉としては、とても危うい言葉ではないか。雑多に見えている事柄が、彼らにとって一番合理的ではないのか。その観点でみると、本当に提案した計画が良くて、現代の流通システムはまずいのか。どこか、全体の構成を見ているようで、消費者などの自分に近い対象にだけ良い計画になっていないか。言葉からもう一度見直してみるといいのではないだろうか。あとは、交通計画が怪しく見えるからそこも見直してほしい。と、最後まで刺々しいコメントをしてしまったが、とりあえず、お疲れ様！

藤田匠

卒制期間、めちゃくちゃ一緒にいたので提案の変遷をお互いよく知っていると思う。
建築の設計というより、設計に向き合う態度にとても感心していて、敷地であったり、計画であったり、建築を設計する要因全てにしっかり向き合っていたからこそ、建築を設計するときに手がとまってしまっていたんだと思う。自分は細かいことは棚に上げてしまうところがあるから見習わないといけないと感じてます。真面目すぎる部分もあって、人のエスキスを真に受けすぎてしまうところもあるから、空間を作るときはもう少し自分を信じてみてもいいと思う（笑）
きみが隣のブースだったせいでミスチルにどハマりしちゃった。
ps. 後輩のお手伝いさんには本当に感謝した方がいいと思う。いなかったら卒業できてないよね。

永長穂高